チュウリップの幻術

宮沢賢治

この農園(のうえん)のすもものかきねはいっぱいに青じろい花をつけています。

雲は光って立派(りっぱ)な 玉髄(ぎょくずい) の置物(おきもの)です。四方の空を繞(めぐ)ります。

すもものかきねのはずれから一人の洋傘(ようがさ)直しが荷物(にもつ)をしょって、この月光をちりばめた 緑(みどり) の 障壁(しょうへき) に沿(そ)ってやって来ます。

てくてくあるいてくるその黒い細い脚(あし)はたしかに鹿(しか)に肖(に)ています。そして日が照(て)っているために荷物の上にかざされた赤白だんだらの小さな洋傘は有平糖(あるへいとう)でできてるように思われます。

（洋傘直し、洋傘直し、なぜそうちらちらかきねのすきから農園の中をのぞくのか。）

そしててくてくやって来ます。有平糖のその洋傘はいよいよひかり洋傘直しのその顔はいよいよ熱（ほて）って笑（わら）っています。

（洋傘直し、洋傘直し、なぜ農園の入口でおまえはきくっと曲（まが）るのか。農園の中などにおまえの仕事（しごと）はあるまいよ。）

洋傘（ようがさ）直しは農園（のうえん）の中へ入ります。しめった五月の黒つちにチュウリップは無雑作（むぞうさ）に並（なら）べて植（う）えられ、一めんに咲（さ）き、かすかにかすかにゆらいでいます。

（洋傘直し、洋傘直し。荷物をおろし、おまえは汗（あせ）を拭（ふ）いている。そこらに立ってしばらく花を見ようというのか。そうでないならそこらに立っていけないよ。）

園丁（えんてい）がこてをさげて青い上着（うわぎ）の袖（そで）で額（ひたい）の汗（あせ）を拭（ふ）きながら向（むこ）うの黒い独乙唐檜（ドイツとうひ）の茂（しげ）みの中から出て来ます。

「何のご用ですか。」

「私は洋傘直しですが何かご用はありませんか。若（も）しまた何か鋏（はさみ）でも研（と）ぐのがありましたらそちらのほうもいたします。」

「ああそうですか。一寸（ちょっと）お待（ま）ちなさい。主人（しゅじん）に聞いてあげましょう。」

「どうかお願いいたします。」

青い上着の園丁は独乙唐檜の茂みをくぐって消えて行き、それからぽっと陽も消えました。

よっぽど西にその太陽が傾いて、いま入ったばかりの雲の間から沢山の白い光の棒を投げそれは向うの山脈のあちこちに落ちてさびしい群青の泣き笑いをします。

有平糖の洋傘もいまは普通の赤と白とのキャラコです。

それから今度は風が吹きたちまち太陽は雲を外れチュウリップの畑にも不意に明るく陽が射しました。

まっ赤な花がぷらぷらゆれて光っています。

園丁がいつか俄かにやって来てガチャッと持って来たものを置きました。

「これだけお願いするそうです。」

「へい。ええと。この剪定鋏はひどく捩れておりますから鍛冶に一ぺんおかけなさらないと直りません。こちらのほうはみんな出来ます。はじめにお値段を決めておいてよろしかったらお研ぎいたしましょう。」

「そうですか。どれだけですか。」

「こちらが八銭、こちらが十銭、こちらの鋏は二丁で十五銭にいたしておきましょう。」

「ようござんす。じゃ願います。水がありますか。持って来てあげましょう。その芝（しば）の上がいいですか。どこでもあなたのすきな処（ところ）でおやりなさい。」

「ええ、水は私が持（も）って参（まい）ります。」

「そうですか。そこのかきねのこっち側（がわ）を少し右へついておいでなさい。井戸（いど）があります。」

「へい。それではお研ぎいたしましょう。」

「ええ。」

園丁（えんてい）はまた唐檜（とうひ）の中にはいり洋傘（ようがさ）直しは荷物（にもつ）の底（そこ）の道具（どうぐ）のはいった引き出しをあけ缶（かん）を持って水を取（と）りに行きます。

そのあとで陽がまたふっと消え、風が吹き、キャラコの洋傘はさびしくゆれます。

それから洋傘直しは缶の水をぱちゃぱちゃこぼしながら戻って来ます。

鋼砥の上で金鋼砂がじゃりじゃり云いチュウリップはぷらぷらゆれ、陽がまた降って赤い花は光ります。

そこで砥石に水が張られすっすと払われ、秋の香魚の腹にあるような青い紋がもう刃物の鋼にあらわれました。

ひばりはいつか空にのぼって行ってチーチクチーチクやり出します。高い処で風がどんどん吹きはじめ

雲はだんだん融けていってすっかり明るくなり、太陽は少しの午睡のあとのようにどこか青くぼんやりかすんではいますがたしかにかがやく五月のひるすぎを拵えました。

青い上着の園丁が、唐檜の中から、またいそがしく出て来ます。

「お折角ですね、いい天気になりました。もう一つお願いしたいんですがね。」

「何ですか。」

「これですよ。」若い園丁は少し顔を赤くしながら上着のかくしから角柄の西洋剃刀を取り出します。

洋傘直しはそれを受け取って開いて刃をよく改めます。

「これはどこでお買いになりました。」

「貰ったんですよ。」

「研ぎますか。」

「ええ。」

「それじゃ研いでおきましょう。」

「すぐ来ますからね、じきに三時のやすみです。」園丁は笑って光ってまた唐檜の中にはいります。

太陽はいまはすっかり午睡のあとの光のもやを払いましたので山脈も青くかがやき、さっきまで雲にま

ぎれてわからなかった雪の死火山もはっきり土耳古玉のそらに浮きあがりました。

洋傘直しは引き出しから合せ砥を出し一寸水をかけ黒い滑らかな石でしずかに練りはじめます。それからパチッと石をとります。

(おお、洋傘直し、洋傘直し、なぜその石をそんなに眼の近くまで持って行ってじっとながめているのだ。石に景色が描いてあるのか。あの、黒い山がむくむく重なり、その向うには定めない雲が翔け、渓の水は風より軽く幾本の木は険しい崖からからだを曲げて空に向う、あの景色が石の滑らかな面に描いてあるのか。)

洋傘直しは石を置(お)き剃刀(かみそり)を取ります。 剃刀は青ぞらをうつせば青くぎらっと光ります。それは音なく砥石(といし)をすべり陽(ひ)の光が強いので洋傘直しはポタポタ汗(あせ)を落(おと)します。 今は全(まった)く五月のまひるです。

畑(はたけ)の黒土はわずかに息(いき)をはき風が吹(ふ)いて花は強くゆれ、唐檜も動きます。

洋傘直しは剃刀をていねいに調(しら)べそれから茶いろの粗布(あらぬの)の上にできあがった仕事(しごと)をみんな載(の)せほっと息して立ちあがります。

そして一足チュウリップの方に近づきます。

園丁が顔をまっ赤(か)にほてらして飛(と)んで来ました。

「もう出来たんですか。」

「ええ。」

「それでは代(だい)を持(も)って来ました。そっちは三十三銭(せん)ですね。お取(と)り下さい。それから私の分はいくらですか。」

洋傘(ようがさ)直しは帽子(ぼうし)をとり銀貨(ぎんか)と銅貨(どうか)とを受(う)け取(と)ります。

「ありがとうございます。剃刀(かみそり)のほうは要(い)りません。」

「どうしてですか。」

「お負(ま)けいたしておきましょう。」

「まあ取って下さい。」

「いいえ、いただくほどじゃありません。」

「そうですか。ありがとうございました。そんなら一寸向う（ちょっとむこう）の番小屋（ばんごや）までおいで下さい。お茶でもさしあげましょう。」

「いいえ、もう失礼（しつれい）いたします。」

「それではあんまりです。一寸お待（ま）ち下さい。ええと、仕方（しかた）ない、そんならまあ私の作った花でも見て行って下さい。」

「ええ、ありがとう。拝見（はいけん）しましょう。」

「そうですか。では。」

その気紛（きまぐ）れの洋傘直しと園丁（えんてい）とはうっこんこうの

畑(はたけ)の方へ五、六歩寄(よ)ります。

主人らしい人の縞(しま)のシャツが唐檜(とうひ)の向うでチラッとします。園丁はそっちを見かすかに笑い何か云(い)いかけようとします。

けれどもシャツは見えなくなり、園丁は花を指(ゆび)さします。

「ね、此(こ)の黄と橙(だいだい)の大きな斑(ぶち)はアメリカから直(じ)かに取(と)りました。こちらの黄いろは見ていると額(ひたい)が痛(いた)くなるでしょう。」

「ええ。」

「この赤と白の斑(ぶち)は私はいつでも昔(むかし)の海賊(かいぞく)のチョッ

キのような気がするんですよ。ね。

それからこれはまっ赤（か）な羽二重（はぶたえ）のコップでしょう。この花びらは半ぶんすきとおっているので大へん有名（ゆうめい）です。ですからこいつの球（きゅう）はずいぶんみんなで欲（ほ）しがります。」

「ええ、全（まった）く立派（りっぱ）です。赤い花は風で動（うご）いている時よりもじっとしている時のほうがいいようですね。」

「そうです。そうです。そして一寸（ちょっと）あいつをごらんなさい。ね。そら、その黄いろの隣（とな）りのあいつです。」

「あの小さな白いのですか。」

「そうです、あれは此処（ここ）では一番大切なのです。まあ

しばらくじっと見詰めてごらんなさい。どうです、形のいいことは一等でしょう。」

洋傘直しはしばらくその花に見入ります。そしてだまってしまいます。

「ずいぶん寂かな緑の柄でしょう。風にゆらいで微かに光っているようです。いかにもその柄が風に靭っているようです。けれども実は少しも動いておりません。それにあの白い小さな花は何か不思議な合図を空に送っているようにあなたには思われませんか。」

洋傘直しはいきなり高く叫びます。

「ああ、そうです、そうです、見えました。

けれども何だか空のひばりの羽の動かしようが、いや鳴きようが、さっきと調子（ちょうし）をちがえてきたではありませんか。」

「そうでしょうとも、それですから、ごらんなさい。あの花の 盃（さかずき） の中からぎらぎらぎら光ってすきとおる蒸気（じょうき）が丁度（ちょうど）水へ砂糖（さとう）を溶（と）かしたときのようにユラユラユラユラ空へ昇（のぼ）って行くでしょう。」

「ええ、ええ、そうです。」

「そして、そら、光が湧（わ）いているでしょう。おお、湧きあがる、湧きあがる、花の 盃（さかずき） をあふれてひろがり湧きあがりひろがりひろがりもう青ぞらも光の波（なみ）で一

ぱいです。山脈の雪も光の中で機嫌よく空へ笑っています。湧きます、湧きます。ふう、チュウリップの光の酒。どうです。チュウリップの光の酒。ほめて下さい。」

「ええ、このエステルは上等です。とても合成できません。」

「おや、エステルだって、合成だって、そいつは素敵だ。あなたはどこかの化学大学校を出た方ですね。」

「いいえ、私はエステル工学校の卒業生です。」

「エステル工学校。ハッハッハ。素敵だ。さあどうです。一杯やりましょう。チュウリップの光の酒。さあ

飲(の)みませんか。」

「いや、やりましょう。よう、あなたの健康(けんこう)を祝(しゅく)します。」

「よう、ご健康を祝します。いい酒です。貧乏(びんぼう)な僕(ぼく)のお酒はまた一層(いっそう)に光っておまけに軽(かる)いのだ。」

「けれどもぜんたいこれでいいんですか。あんまり光が過(す)ぎはしませんか。」

「いいえ心配(しんぱい)ありません。酒があんなに湧きあがり波を立てたり渦(うず)になったり花弁(かべん)をあふれて流(なが)れてもあのチュウリップの緑(みどり)の花柄(かへい)は一寸(ちょっと)もゆらぎはしないのです。さあも一つおやりなさい。」

「ええ、ありがとう。あなたもどうです。奇麗(きれい)な空じゃありませんか。」

「やりますとも、おっと沢山(たくさん)沢山。けれどもいくらこぼれたところでそこら一面(いちめん)チュウリップ酒(しゅ)の波だもの。」

「一面どころじゃありません。そらのはずれから地面(じめん)の底(そこ)まですっかり光の領分(りょうぶん)です。たしかに今は光のお酒が地面の腹(はら)の底(そこ)までしみました。」

「ええ、ええ、そうです。おや、ごらんなさい、向(むこ)うの畑(はたけ)。ね。光の酒に漬(つか)っては花椰菜(はなやさい)でもアスパラガスでも実(じつ)に立派(りっぱ)なものではありませんか。」

「立派ですね。チュウリップ酒で漬けた瓶詰です。しかし一体ひばりはどこまで逃げたでしょう。どこまで逃げて行ったのかしら。自分で斯んな光の波を起しておいてあとはどこかへ逃げるとは気取ってやがる。あんまり気取ってやがる、畜生。」

「まったくそうです。こら、ひばりめ、降りて来い。ははぁ、やつ、溶けたな。こんなに雲もない空にかくれるなんてできないはずだ。溶けたのですよ。」

「いいえ、あいつの歌なら、あの甘ったるい歌なら、さっきから光の中に溶けていましたがひばりはまさか溶けますまい。溶けたとしたらその小さな骨を何かの

網で掬い上げなくちゃなりません。そいつはあんまり手数です。」

「まあそうですね。しかしひばりのことなどはまあどうなろうと構わないではありませんか。全体ひばりというものは小さなもので、空をチーチクチーチク飛ぶだけのもんです。」

「まあ、そうですね、それでいいでしょう。ところが、おやおや、あんなでもやっぱりいいんですか。向うの唐檜が何だかゆれて踊り出すらしいのですよ。」

「唐檜ですか。あいつはみんなで、一小隊はありましょう。みんな若いし擲弾兵です。」

「ゆれて踊っているようですが構いませんか。」

「なあに心配（しんぱい）ありません。どうせチュウリップ酒（しゅ）の中の景色（けしき）です。いくら跳（は）ねてもいいじゃありませんか。」

「そいつは全（まった）くそうですね。まあ大目に見ておきましょう。」

「大目に見ないといけません。いい酒だ。ふう。」

「すももも踊り出しますよ。」

「すももは墻壁仕立（しょうへきじたて）です。ダイアモンドです。枝（えだ）がななめに交叉（こうさ）します。一中隊はありますよ。義勇（ぎゆう）中隊です。」

「やっぱりあんなでいいんですか。」

「構（かま）いませんよ。それよりまああの梨（なし）の木どもをご覧（らん）なさい。枝（えだ）が剪（き）られたばかりなので身体（からだ）が一向（いっこう）釣り合いません。まるで蛹（さなぎ）の踊（おど）りです。」

「蛹踊（さなぎおどり）とはそいつはあんまり可哀（かわい）そうです。すっかり悄気（しょげ）て化石（かせき）してしまったようじゃありませんか。」

「石になるとは。そいつはあんまりひどすぎる。おおい。梨の木。木のまんまでいいんだよ。けれども仲々（なかなか）人の命令（めいれい）をすなおに用いるやつらじゃないんです。」

「それより向（むこ）うのくだものの木の踊りの環（わ）をごらんなさい。まん中に居（い）てきゃんきゃん調子（ちょうし）をとるのがあれが桜桃（おうとう）の木ですか。」

「どれですか。ああれですか。いいえ、あいつは油桃です。やっぱり巴丹杏やまるめろの歌は上手です。どうです。行って仲間にはいりましょうか。行きましょう。」

「行きましょう。おおい。おいらも仲間に入れろ。痛い、畜生。」

「どうかなさったのですか。」

「眼をやられました。どいつかにひどく引っ掻かれたのです。」

「そうでしょう。全体駄目です。どいつも満足の手のあるやつはありません。みんなガリガリ骨ばかり、お

や、いけない、いけない、すっかり崩(くず)れて泣(な)いたりわめいたりむしりあったりなぐったり一体あんまり冗談(じょうだん)が過(す)ぎたのです。」

「ええ、斯(こ)う世(よ)の中が乱(みだ)れては全(まった)くどうも仕方(しかた)ありません。」

「全くそうです。そうら。そら、火です、火です。火がつきました。チュウリップ酒(しゅ)に火がはいったのです。」

「いけない、いけない。はたけも空もみんなけむり、しろけむり。」

「パチパチパチパチパチパチやっている。」

「どうも素敵（すてき）に強い酒（さけ）だと思いましたよ。」

「そうそう、だからこれはあの白いチュウリップでしょう。」

「そうでしょうか。」

「そうです。そうですとも。ここで一番大事（だいじ）な花です。」

「ああ、もうよほど経（た）ったでしょう。チュウリップの幻術（げんじゅつ）にかかっているうちに。もう私は行かなければなりません。さようなら。」

「そうですか、ではさようなら。」

洋傘直（ようがさなお）しは荷物（にもつ）へよろよろ歩いて行き、有平糖（あるへいとう）の

広告つきのその荷物を肩にし、もう一度あのあやしい花をちらっと見てそれからすももの垣根の入口にまっすぐに歩いて行きます。

園丁は何だか顔が青ざめてしばらくそれを見送りやがて唐檜の中へはいります。

太陽はいつかまた雲の間にはいり太い白い光の棒の幾条を山と野原とに落します。

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店
１９９６（平成８）年４月25日初版発行
１９９６（平成８）年６月20日再版発行
底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇」筑摩書房
１９９５（平成７）年６月
入力：土屋隆
校正：川山隆
２００８年５月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。